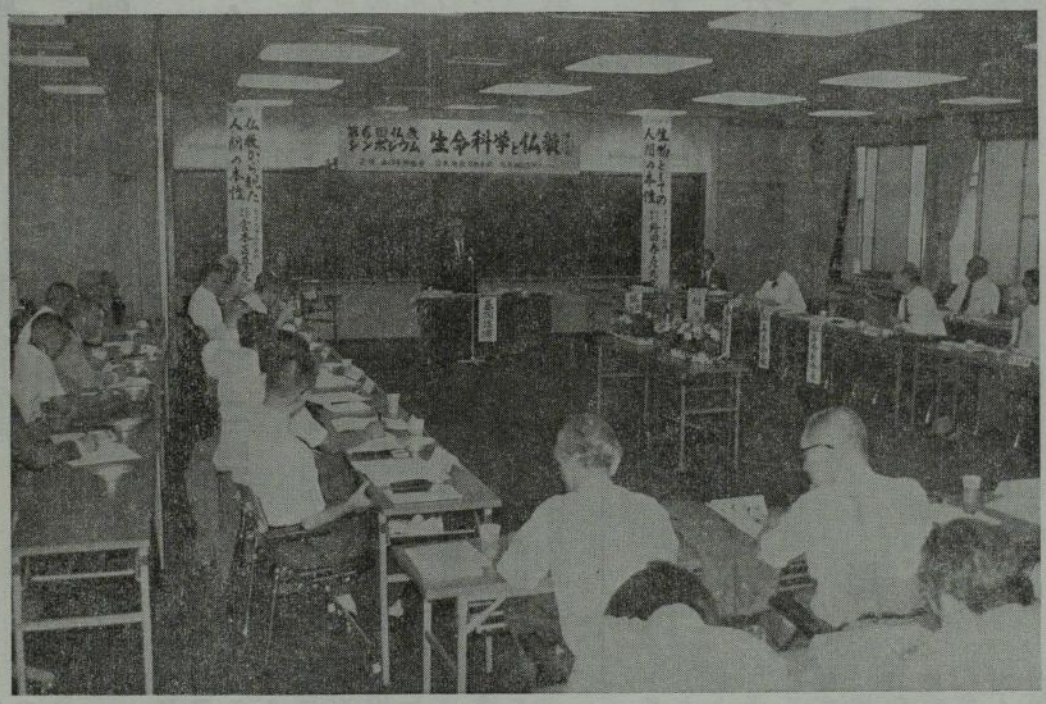
昭和36年1月13日第3種郵便物認可　昭和48年9月1日第190号（毎月1回1日発行1部20円）

NO.190

# 全仏

9/48




日本仏教文化会議「生命科学と仏教」シンポジウムで基調講演する宮本正尊博士――8月21日・箱根で

財団法人　全日本仏教会

全仏
第3種郵便物認可
昭和48年9月1日

# 新理事長に末広愛邦師

末広新理事長

全仏常務理事会はさる八月二十日午前十一時から開かれ、新理事長に末広愛邦師(ﾋﾞﾐ)が選出された。

これは、前理事長鈴木悟師（真宗大谷派宗務総長）が同派宗議会において総長辞職のため、理事を退いたことによって新理事長の選出が行なわれたもので、新たに同派宗務総長になった末広愛邦師が互選により新理事長に選出され就任した。任期は、鈴木前理事長の残任期間を受けつぐもので、今年十二月の役員改選期までである。

末広師は、京都・朱雀坊住職で、大谷大出身、東京本願寺輪番、宗務総長、全仏理事などをつとめている。

常務理事会は、工藤義修氏を座長に議事が進行され、議事録署名委員に山田義道、太田淳昭氏を選出した。

## 全仏常務理事会　二議案承認

**議案第一号**　理事長選出について

前述のとおり、寄付行為により末広愛邦師を選出し、承認された。

**議案第二号**　韓国におけるWFB常任理事会代表派遣について

次期WFB大会が韓国で開催されることに内定しており、その件について現場の視察もかねて、八月二十三日より二十六日まで首都ソウルで開かれる常任理事会に全仏より末広理事長、柳国際文化局長、通訳の織内氏の三名を派遣することを承認。

**報告事項**（一）　国際専門委員委嘱について

織内七郎氏（千代田トラベル社長）の専門委員追加委嘱を承認。これによって同専門委員会は十七名の委員となった。

**同**（二）　評議員委嘱について

真宗大谷派および念法真教より選出の評議員の委嘱を承認。

（念法真教）長谷川霊信、一瀬良覚

（真宗大谷派）福島昭信、後藤契雪、橿原信暁、土肥恵恩、禿諦住

**同**（三）　全仏大会報告について

各宗代表者会議、県仏代表者会議、各部会について報告し、さらに予算執行状況について担当部長より報告、決算が出来次第近々大会監査会を開催することを報告し、了承。

なお、当日の出席者は、山田義道、野村宗春、栗本俊道、別所弘因、太田淳昭、工藤義修、伊藤治雄、末広愛邦、椎谷健の各師（順不同・敬称略）

## 昭和五十年の四月に韓国で世界大会開く

### WFB常任理事会報告　柳　了堅

世界仏教徒連盟（本部タイ国バンコク市）の常任理事会が、八月二十四日より三日間韓国ソウル特別市において開催され、常任理事国である全日本仏教会では新理事長末広愛邦師を派遣することに決定し、小職および国際専門委員織内七郎氏が随行として、八月二十三日十一時五十分羽田空港発のKE七〇四便で出発、十三時五十二分ソウル到着、直ちに韓国側事務当局と連絡登録を行った。

翌二十四日九時に大韓仏教曹溪宗の曹溪寺へ

前夜到着したブーン妃殿下以下各代表とともに参拝、総務院長釈慶山師はじめ幹部と懇談した。

午後から徐東国大学総長の招待会を終えて東国大学を訪問、仏教交流について膝を交え懇談し有意義であった。

夜は韓国側WFB会長であり、今回の責任者である金済源氏夫妻の招宴が金氏邸で催され参会者多数で盛会であった。

金済源氏は国会議員で実力者であり、夫人も国会議員として活躍中で、昨年わが国外務省の招請で文化視察のため来日され、小職が東京、京都の各方面を案内した奇しき因縁の人で再会を非常に喜ん

でいただいた。

二十五日は韓国仏教側との合同懇談会（ジョイント・ディスカッション）が日程に従って東国大学内ブディスト・ホールで開催され各国の仏教事情が紹介され日本仏教については末広理事長が報告を行った。

つづいて禅センターを訪問、そのあと精進料理で歓待された。

午後二時よりタワーホテル十七階の会場で理事会が開催された。出席者はタイのプーン妃殿下、サンガバン事務局長、マレーシア―邸隆漢、鄭天柱。スリランカ―スタンレーウイリアム。ハワイ―宮原スナオ。タイ―WFB財務担当、アンファイ・ヤエゲソン。日本―末広愛邦、柳了堅、織内七郎の各氏と韓国側より金会長代理朴副会長、孫慶山師等が出席し宮原スナオ氏が議長となって会議が進められた。

第一議題、第十一回大会開催に関する件。これについて韓国側から開催を申し出た経緯の説明があったが、韓国側から国内選挙その他の事情から来年開催すべきところを、一年延期して昭和五十年秋としたい旨提案あり、各国代表もこれに関して異議をとなえ、結局昭和五十年四月二十日から三十日までの一週間とし合意の上決議した。

第二議題、次回常任理事会開催の件。昭和四十九年五月ウエサカを中心として、新しく完成したタイのWFB本部で開催することを決議した。

第三議題、国連ルンビニー開発委員会WFB委員一名補充の件。

同委員会の委員九名のうちWFBよりプーン妃殿下とマララセケーラの二名であるが、マ博士の逝去により欠員補充が審議され、ニューヨークに出向く機会が多くなるであろうとし、その意味でハワイの宮原氏が適任であるとして宮原氏を推選、結局異議なく決定、宮原氏も受諾した。

以上で理事会は終ったが、終了に際し第十二回大会をぜひ日本で引受けてもらいたい旨の非公式発言が各国代表からあり、末広理事長笑顔で答え、和やかに閉会した。午後七時より駐韓タイ国バヨン大使の招宴が大使公邸で開かれた。

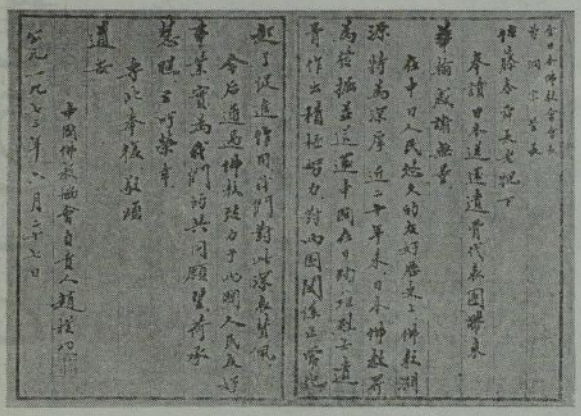
翌二十六日は午前九時から、WFBYの訓練会議が東国大学ブディスト・ホールで開催され、各国代表とともに末広理事長以下三名の日本代表も、オブザーバーとして出席、金知見教授が議長となりあいさつ、祝辞等型通りの開会式があった。

出席国は台湾、香港、インドネシア、クメール共和国、ラオス、マレーシア、スリランカ、タイ、ヴェトナム、韓国で三十一日まで熱心に訓練がなされた。

日本側一行は、翌二十七日KE七〇一便でプーン妃殿下一行と午後四時十五分無事日本に帰国した。

このたびの訪韓にあたり、末広理事長の陣頭指揮と織内国際専門委員の献身的な御奉仕に深く感謝するとともに、日本仏教に対する各国の期待が非常に大きいことを痛感した。

（全仏国際文化局長）



佐藤会長宛に届いた返書

# 中国仏教会から返書

先般、六月十二日、日中友好宗教者懇話会代表団（会長西川景文師）一行十一名が中国訪問の際、全日本仏教会が菅原恵隠師に託した中国仏教会々長、趙樸初居士宛の親書（本誌七月号掲載）に対する返事が、このほど佐藤泰舜会長宛に寄せられた。

内容（訳文）は次ぎの通り。

全日本仏教会々長
曹洞宗管長
佐藤泰舜老猊下

中国殉難者遺骨送還日本代表団がもたらした尊翰を奉読し感激無量に存じます。

中日両国人民の悠久なる友好の歴史の上で、仏教の淵源は特別に深厚なものがございます。

ここ二十年来、日本仏教界は日本において殉難した中国烈士の遺骨の発掘送還のために積極的な努力を払われたことは、中日両国関係の正常化に対して多大の促進作用を果されました。

われらは、これに対し深く讃仰感佩の意を表するものでございます。

今後は、仏教を通じて、両国人民の友好事業に貢献することを、我々共同願望の実現と致したく存じ上げます。

荷承慧照（ご照顧を賜り）栄幸の至りに存じます。

ここに謹んでご返書申し上げます。

敬頌道安

中国仏教協会責任者
趙樸初（印）

一九七三年六月二十七日

# 彼岸に想うこと

浄土宗西光院住職　若林隆光

## 同窓の友のひと言

大学の頃、サンスクリットの予習に倦んで「ああ、何でこんな面倒くさいもの勉強しなきゃならないんだろうな」とあくびまじりに洩らした私の敷声に、同窓のU君が言下に「仏になるためさ」と応じた。U君は著名な真宗本願寺派の学匠の御曹子であっただけに、漠然と成仏とは程遠いように思っていたので、この即座の一言は胸にこたえ、私は今もって忘れることができない。

大学に入り仏教を学ぶことを当然とは考えてはいたが、それが「仏になるため」とまでは深く思っていなかった私は、自分の迂闊さを愧じると共に、学匠として大をなしたU君の御父君の業績が、決して単なる有難がらせのお談義ではなく、自身が「仏になるため」の深い苦しみから生み出されたものであることに気付かされたのであった。

「仏になるため」の一言を残したU君は、戦争によって地理的には仏の国に近づいたが、遂にビルマ戦線からの帰還者の列に入ることはできなかった。

彼岸を迎えまず思い当るのは、この「仏になるため」の一言である。日域が大乗相応の地であるとの自覚は、古人の体験に基ずくところであり、文字通りにうけとってよいことであろう。しかしそれは大乗相応を他人に説くのみで、文字の上に浮いてしまってよいということでは決してあるまい。日本仏教の骨格を形成したといわれる本覚門思想が、その卓越性を主張し得るためには、いくつかの前提が必要であったのであり、彼岸に達するにはまず六波羅蜜が自分の問題であることを念頭におかねばなるまい。

十波羅蜜として方便などの四が説かれるのは、あくまでも六度を補助するためであり、大乗について説き、本覚について論ずる方便が、どんなに勝れていようとも、渡ることを忘れた腰のきまらぬ空談義の無意味さは、民衆が最もよく知っている。この意味で彼岸についての反省は、彼岸とは自分が「仏になること」を意味していることから始まるべきであり、彼岸と「お彼岸」乃至「彼岸会」との違いを認識することから始めらるべきであろう。

彼岸会の起源がインド・中国になくてわが国の大同元（八〇六）年三月、崇道天皇即ち故早良親王のために、諸国国分寺の僧をして春秋二仲、月別七月、金剛般若経を読ましめたに始まることはよくいわれるところであるが、もし、これが今日の「お彼岸」の起源と認められるならば、このことは正に彼岸の日本的とらえ方であるといえよう。何となれば早良親王は崇道天皇とおくり名こそされているが、長岡遷都に関し藤原種継暗殺の責を負わされて、光仁天皇の皇太子の地位を廃され、淡路島配流の途中、飢えて憤死し、桓武天皇の皇后・中宮等にたたりをなしたとされた怨霊第一号ともいうべき方であったからである。そして読誦を命じられた金剛般若経は造塔等の功徳に勝って読誦の功を説く経典であったのである。

皇后等の連続死という怨霊説のできやすい条件の下で、病める桓武天皇か天皇の意を体した奈良の僧綱たちが、春秋二季の読誦を諸国国分寺に命じたのは頗るあり得ることであり、事の起りが九月二十四日に暗殺された藤原種継にあったこともこれを傍証するかのようである。短くて、しかもインド・中国などで権威の認められていた金剛般若経が、空とか大乗の語を用いて居らず、たまたま読誦の功を説いていたことは、般若とか空とかの教義にさほど熟達していなかった九世紀初頭の仏教界の人々にはまことに好都合であったであろう。

有為法の空を説く経典は、その空を体得して彼岸に達する手だてとしてではなく、はじめから「如露亦如電応作如是観」の口調のよさで彼岸会にされてしまったのである。仏教辞典類が日本後紀の記述のみを取上げて、彼岸会の起源をここにおき、その裏にある早良親王鎮魂の事実を無視しているのは彼岸が到彼岸としてではなく、彼岸会としてばかりとらえられてきた反省の足りなさを示しているものではないだろうか。

しかし日本の仏教は決してこの奈良仏教の彼岸会の線上に花開いたものではない。鎌倉新仏教の祖師たちが、すべてその流れを汲んだ最澄が帰朝して籠山十二年を叫んだのは、実は正にこのときであったのである。（延暦二十四、八〇五年帰朝）彼の旧仏教への戦いの激しさは、彼岸への努力を彼岸会にすりかえてしまおうとしていた南都仏教への戦いでもあったとはいえないだろうか。

仏はみ顔きらきらしき金銅仏としてその美しさから神性の尊厳が判断され「君親の恩のため」に造られた寺々にその仏像が納められ、寺外の布教が禁

ぜられ、例外としてしか山林修行を認めない僧尼令の下に甘んじていた僧綱統制下の仏教界で、金剛般若経が読誦されてしまっては、経の説く有無を超えた空の思想を理解し、体現しようとする「仏になる」道は、怨霊折伏や先祖追善の有に拘わる意識におおわれてしまう。最澄はこの彼岸の到彼岸性をいいかえれば六度の度に含まれる此土と異質の彼岸に渡る性格が、追善慰霊の会となって上すべりしてしまうことを、十二年の籠山修行によって防ごうとしたのである。聖徳太子が基礎をおいた大乗の精神が、奈良時代を空しく過し、最澄に至ってようやく知己を得た感があるのも、この間の消息を物語るものであろう。

しかし量の積重ねがやがて質の変化をもたらすこと、いわば非連続の連続の譬喩として、これ以上の適切なものは求められないと思われる彼岸という譬喩は、その表現の美しさ、智恵深さにもかかわらず、決してその困難さをやわらげるものではない。仏になることを到彼岸といいかえても、自分をふくめた衆生のすべてが仏になることは五十六億七千万年後にはじめて実現の可能性を持ち得るかという程の非現実的な事実なのである。一部を密教の祈祷が負担したにせよ、到彼岸はいわば絶望の象徴でもある。

十世紀以降の末法思想は、よく貴族勢力没落を背景としてのみ説かれているが、末法法滅の歎きは、彼岸に到り得ない絶望の叫びであり、この困難を超克することなしには、われひと共に救われることはできず、仏にならぬ、仏になれぬ教は仏教ではなく、仏教は存在の根拠を失うほかはない。

こうして一度は最澄によって、到彼岸たるべしとして否定された彼岸は、彼岸会として再び甦ることになる。浄土教家は深めきった絶望の底から時機を踏切りの弾み板として、極楽の彼岸を望んだ。観無量寿経の日想観に与えられた解釈が彼岸会に新しい生命を与え、四天王寺の西門は、極楽の東門に接すると信ぜられたが、そう信ずることによって、人々は正に此土の四天王寺から極楽の彼岸に達することができたのである。他方禅家の人々は、この時機そのものを否定することによって絶望の淵から上ったのである。無限の彼方にあった彼岸は、彼岸を目指すことそのことによって到達されるのである。只管打坐そのことが彼岸であり、いわば彼岸会を営むこと自体が彼岸なのである。

## 到彼岸へ古人の知恵

彼岸会は今や他人の怨霊を鎮めるためにあるのではなく、自他をふくめた一切衆生、いいかえればこの自分のためにあるのであり、このことを知り、知らしめることが、真の彼岸会の意義といってよいことになったのい日本の仏教のあり方といえよう。

永代経を営み、施餓鬼を営み、彼岸まわりを行い、お団子を供えることに布施の心がこもるべきことを教えるのも、決して意義なしとはしない。しかし九世紀初頭に、鎮魂の手段として行われた彼岸会をそのまま現代に持ってきたのでは、彼岸という譬喩によって到彼岸すなわち仏になることを表わした古人の知恵を生かしきったものとはいえないのではなかろうか。

此岸から彼岸に渡るには、橋にせよ舟にせよ、筏にせよ、泳いで渡るにせよ、はたまた飛行機によるにせよ、何等かの困難が伴うものであり、その間に何等かの質的転換があることを自覚覚他せしめるものでなければ、彼岸会を彼岸会の名において行う意味は生きてこない。そして現代の彼岸会が殆んど単なる慣習に堕してしまったこと、昔金剛般若経読誦に期待された程の功徳への期待も現代人に抱かせていない単なる「お彼岸法要」になり果てているのは、このことを忘れた結果とはいえないであろうか。

葬式仏教とは、僧侶の側からいえば葬式法要ばかり執行して能事了れりとしている仏教僧侶への蔑称ということになろうが、逆に信徒側についていえば、葬式のときしか寺に来ないけしからぬ信徒の謂ではないか。明治以来の学校教育の悪弊の集積という前に、全ての宗派がとり行う「彼岸」行事のとり行い方の根底を考え直して見てはどうであろうか。お彼岸が彼岸への道、仏になる道と知っている信徒は、全檀信徒の何%あるであろうか。

お彼岸のいわれ、彼岸会の起源を解説するばかりでは、仏教は常に後向きのそしりを免れ得ない。のぞきからくりで地獄極楽を見世物にする時代には民衆にとってそれが彼岸を望み見る手段であった。麦や稗の飯をたべていたときには、米の粉の団子に砂糖入りの小豆餡は、布施の手段として最上のものであったであろう。昔あったのぞきからくりについて語るのはよい。彼岸団子について語るのはなつかしいであろう。しかしいつでもいつまでも、のぞきからくりや彼岸団子について語っているならば、葬式にしかこない葬式仏教徒を彼岸に立ち向わせることはできない。「仏になるためさ」と言い切らせたあるものが失われているならばこの頃流行し出したチカチカする祭壇の豆電球のように蠟燭の落着きも電灯の明るさも持たない、正に愚劣な過去の模倣という以外の何物でもない。

彼岸会は彼岸が無限の彼方にあることによって、無限に前向きに進み得ることを知り、知らしめる最もよき機会であるはずである。学問の名をかりた怨霊説が寺々をのみこんで、大乗相応の日域にはびこるような愚劣さは全仏教徒が仏になるために、真の彼岸を目指すことを知った暁には自ら消えて行くと思われる。（全仏文化専門委員）

全仏
第3種郵便物認可

# 南方戦跡の地訪ねて

# 雷鳴の墓地に感慨

真宗若手僧侶巡拝団　立花記久丸

今回、私たち都内在住の真宗若手僧侶が、東南アジア戦没者の追悼法要と遺跡寺院巡拝旅行を思い立ったのは、極めて単純な理由からでありました。

ある会合の席上、今日われわれの生活の中で「お蔭様」という挨拶は、ありきたりの日常会話の上でしきりと使用されているものの、本来の言葉の奥にひそむ意味深さを嘗て自分たちが感じたことがあったろうか、という点に論議が集中しました。そして枚挙にいとまのない、それにまつわる事柄を話し合って行くうちに、戦後はや三十年になろうとしている今日、われわれの身の廻りにも、そして少くともわれわれの体験の上にあるくせに、もう遠い記憶の片隅に追いやられたようにすらある事柄に私たちの思いは至りました。熾烈な最後をとげ、海に山に歪められた青春を精一杯生きた人々が、今日の日本の姿を想像だにせず戦渦の中に身を投じ、不帰の人となった数多くの同朋があることに。

私たちの今日は、そうした貴い犠牲の上に成り立っているといっても決して過言ではありますまい。人知れぬ野に山に文字通り身をもって悠久の大義に捧じた兵士たちの激戦の跡を訪ね、その徳を讃えるとともに、故郷の今日繁栄を報告しつつ、一巻の読経を誦して追悼の志とすることこそ、私たち仏教徒の使命であろうと結論し、すぐさま計画を立て、決行の日を待つこととなったのであります。

計画されてから二カ年はまたたく間に過ぎて行きました。参加者は各自に正信偈（親鸞聖人御選述、顕浄土教行証文類行巻）を書写し、参拝記念の一環として埋蔵すべく用意をしたほか万端の準備は整って、去る七月二十六日朝九時、教区代表者の歓送の辞を耳の底にとどめ、全仏よりお預りした仏旗を先頭にして、八月五日までの全行程、十泊十一日の旅行に全員十名の巡拝法要団は、中華航空機で羽田を後にしました。

途中、台北、香港、クアラルンプールを経て、シンガポールへ現地時間午後九時半に到着し、バスでブキテマ台地のエクアトリアル・ホテルへ向い、第一夜の夢を結びました。

翌日午前中に市内観光をすませ、午後私たちはまばらな人家の裏手にひっそりとある日本人墓地へ法要すべく参拝の足を運んで、全仏拝領のお花を小さな慰霊堂に飾り、声高く勤行を始めました。聞きなれぬ声を耳にした近所の子どもたちが遠巻きに寄ってきたり、時に鋭い雷鳴が轟いたりする中で、私たちは墓地の隅にある自然石で出来た戦没者碑に散華を行ない「この読経、十方に響流せよ、深く永い眠りにある同朋の耳に届け」とばかり、声を振り絞って勤行させて頂いたことでありました。

目に流れ込む汗と、こみ上げて来る胸の熱いかたまりに、ともすれば経文の文字も霞み勝ちな私は、しばし小さな喜びに浸っておりましたが、やがて読経を終え記念写真を撮った後、墓地を離れました。汗で濡れた法衣は私の足の重さに加わり、ずしりと肩に感じられ、墓地の入口にさしかかったときには、振り返って合掌せずには居られませんでした。もう二度と訪れることもないかも知れぬと思いながら頭を下げる私の口から、ふと「有難うございました。お蔭様でありました」との言葉が洩れたのでした。

狭いバスの中で、法衣を替え始める間に車は動き出し、誰いうとなく、一同その手を休めると、墓地が見えなくなるまで合掌しておったのも、今は懐しくも暖い思い出であります。

各所の戦跡を経めぐり、追悼の意に胸打たれながら迎えた八月二日、私たち一行はバンコクのホテルを朝七時に出発し

シンガポールの日本人墓地で法要を勤める一行

四時間余を費してクワイ河畔にある慰霊地へ着きました。冷房のきいた車内から降り立つと、そこは炎天の地、いささか目まいを感ずるほどでありましたが、同地には、クワイ河橋梁工事のために、現地人、日本人合わせて数千名の尊い生命がマラリアや疫痢その他で失われております。

私たちの読経の声が強い日射しの下に響きわたりました。いつもながらの汗と感慨とともにほどなく法要が終り、振り返った私たちの目に入ったのは、三人の参拝する同朋。話しかけてみますと、現地に駐在の書記官の御一家で、私たちの今回の旅行目的をお伝えすると、今後、この慰霊地を充分に管理して行きたいという嬉しい言葉が返って来ました。非道な侵略を加えた当地にあって、ともすれば冷罵の視線を投げられる中で労苦される御一家のこの一言に、私は知らず胸の熱い思いをなしたのでありました。

岸辺に降り立つと茶褐色の水面は公害のない青空を映し、折しも「ボーッ」という汽笛と共に対岸より橋を渡る一連の列車の音がひときわ耳に鳴って「聖戦」の名のもとに行われた無謀な戦闘に散った人々の声を私に知らせるようでありました。

「お蔭様」で、私たちは仏旗とともに八月五日無事に羽田へ帰ってまいりました。大きなトラブルもアクシデントにも見舞われず、一同にとって感激深く、また実り多い旅はこうして終りました。

当初の目的である「お蔭様」の意味を戦没者の上に知ること、それは帰国早々の現在、まだ私の胸に明らかにされたとはいい得ませんが、私たちの同朋が血を流し、空しく熱帯の山野に今なお散じている事実は、他国を侵略した嘗ての苦い痛みに増幅されて、私に強く迫ります。何よりの成果がそれでありましょう。

## プーン妃殿下の来日歓迎会開く

八月二十七日WFB会長プーン妃殿下サンガバシ事務総長及びマレーシア代表一行六名が来日し、同日六時より品川パシフィックホテルで、末広理事長、麻布総長をはじめ事務総局と仏婦、船口暉子氏、孝道教団椎谷健氏が出席して歓迎会を開催した。

一行は、八月二十三日から二十六日の間、韓国で開催された常任理事会の帰り日本に立ち寄ったもので、プーン妃殿下サンガバシ事務総長は、四年来の来日で東京の激しい変化や各国に侵透していく日本の新興宗教団体の教勢に驚かれていたようであった。

一行は、一日だけの東京の休日を満喫され、翌二十八日タイペイに向い、東南アジア各国を訪問して九月二日に母国に帰る予定である。

## 「生命科学と仏教」完結

### シンポジウム三年目

今年度の日本仏教文化会議（議長宮本正尊博士）は全日本仏教会、国際仏教交流センター共催、読売新聞社後援のもとさる八月二十一・二の両日、箱根仙石原湖尻富士見荘を会場に開催された。

「生命科学と仏教」と、最近注目を集めている学者をテーマに取り組んで、今年はその第三年次、結びの年として熱心なシンポジウムが展開された。

二十一日午後一時より開会式が行われ西義雄師の導唱により三帰依文を全員で唱和したあと、麻布事務総長の開会挨拶、主催者側から全仏稲岡常務理事（末広理事長欠席のため）並びに国際仏教交流センター岡野貫美子名誉副会長の挨拶があって閉式。引きつづき宮本議長の挨拶によって会議に入り、まず東大教授野田春彦博士の「生物としての人間の本性」東大名誉教授宮本正尊博士の「仏教から観た人間の本性」と題する基調講演が行われ、そのあと分子生物学、精神医学、心理学、仏教学等斯界の権威者二十数名が討論した。

翌日は朝九時から午後三時まで、意見発表、討論が行われ、最後に西副議長が三年間のまとめを発表して終了した。

なお、シンポジウムの要旨は次号本誌に掲載する予定になっている。

## 全日仏青の夏期セミナー盛ん

### 奈良・信貴山玉蔵院で

「全日本仏教青年会（全仏加盟団体）」主催による一九七三年度夏期セミナーが奈良県の霊峰、聖徳太子ゆかりの地、信貴山玉蔵院を会場に去る八月二十七、二十八日の両日開催された。今回の夏期セミナーは例年夏期結集として行われて来たものをセミナー形式にかえたものである。講師にアサヒファミリーニュース編集長・中尾貞観氏、中外日報社長・吉田留次郎氏をむかえてジャーナリストの面から「現代の苦悩」、宗教的立場から「自

然の調和を乱すもの」という題でご講演をいただき、ユニークな現代のとらえ方について討論し、青年僧侶の進むべき現代の問題点についてその道をさぐりあった。暑い中、大阪、東京より三十九名の参加をえ、盛会裡に閉会した。

# 若人から作文や論文を募集

## 青少年育成国民会議で呼びかけ

社団法人青少年育成国民会議（会長茅誠司）では、総理府、日本放送協会等の後援のもと、青少年が逞ましく心豊かに成長するために、自らの啓発につとめるよう、また、青少年の意見を正しく社会に訴え反映させる機会とするため、毎年全国の青少年から作文・論文を募集しているが、今年度も宗連を通して協力の依頼があったので、広く青少年に応募の呼びかけをお願いします。

要項は次のとおり。

主題

〈論文の部〉

・今、青年にできることは？

〈作文の部〉

・遊びと勉強

・「立志」を考える（十四歳になって）

応募資格（昭和四十八年十一月三十日現在）

〈作文の部〉満十六歳未満の者

〈論文の部〉満十六歳以上、満二十六歳未満の者

応募方法

(1)応募は一名一点に限る

(2)作品は作文の部四〇〇字詰原稿用紙五枚以内。論文の部は一〇枚以内とする

(3)作品はたて書きとし、できるだけ万年筆・ペンを使用して下さい

(4)住所・氏名（ふりがな）・性別・生年月日・職業および勤務先（在学中の者は学校名と学年）を作品の頭初に書いて下さい

(5)本人の作品で未発表のものに限る

(6)作品、添付資料等は返却しません

作品送付先

〒一五五　東京都渋谷区代々木神園町三ノ一　社団法人青少年育成国民会議

締切期日

昭和四十八年十一月三十日（消印有効）

入賞決定と発表

(1)入賞作品は審査委員会で決定する

(2)入賞者については本人に通知するとともに昭和四十九年一月十五日に発表する

表彰

作文の部

一席　内閣総理大臣賞および副賞（記念品）　一名

二席　総理府総務長官賞および副賞（記念品）　二名

三席　青少年育成国民会議会長賞および副賞（記念品）　二十名程度

佳作

論文の部

一席　内閣総理大臣賞および副賞（一〇万円）　一名

二席　総理府総務長官賞および副賞（五万円）　二名

三席　青少年育成国民会議会長賞および副賞（一万円）　二十名程度

佳作

## 哀悼

**伊藤哲雄師**（全仏常務理事、東京本願寺輪番）

八月二十日午後六時、富山県の自坊西養寺で狭心症のため遷化された。行年六十九歳。二十三日、同寺で密葬を執行。別院葬は九月十五日、午後二時より東京別院で営まれる。

師は、昭和四十五年から東京本願寺輪番、東京宗務出張所長を勤め、全仏常務理事、宗議六期。

**森岡善暁師**（真言宗泉涌寺派宗務総長）

八月二十八日午前一時二十五分、副じん腫瘍のため、京都第一赤十字病院で遷化、七十歳。葬儀は、三十日午後二時から、山内の自坊観音寺で執行。全仏評議員を勤めた。

## 事務総局録事（七月・八月）

四日　全仏税務講習会（京都・大谷派会議室）

六日　局内会議

十一日　仏教鑽仰会「都民お盆の集い」出席

十三～十六日　盆休

二十日　WCRP青年部会幹事会

三十日　京都各本山挨拶廻り

三十一日　永平寺へ挨拶

（八月）

三日　関西事務局来局打合せ

六日　局内会議

八日　人生哲学研究会日本総会（於孝道山）出席

九日　文化庁宗務課新旧課長挨拶来局

十日　宗連幹事会

十三～十六日　盆休

二十日　常務理事会

二十一～二十二日　仏教文化会議

二十三日　全仏創立記念日

二十三～二十六日　WFB常任理事会（於ソウル）

二十七日　ブーン妃殿下一行歓迎会

三十一日　局内会議

昭和四十八年九月一日発行
九月号　第一九〇号
発行人　麻布照海
編集人　柳了堅
発行所　財団法人　全日本仏教会
東京都台東区西浅草一ノ五ノ五（東京本願寺内）
電話〇三（八四二）六三四一～三